若手教員と語る　－教育現場の現在と課題－

畑　智明（川崎市立宮内中学校）
水谷　円香（日本工業大学駒場中学校）
松本　夏樹（東京都立第五商業高等学校）
伊藤　貴昭（明治大学文学部）

はじめに

本分科会は，明治大学教職課程常設分科会として設定された分科会であり，今年で早４回目の開催となった。

毎年，教員歴の浅い若手教員にお越しいただき，教員生活の生々しい話が聞けるということで，多くの学生の参加が見られるのも特徴である。

今年度も，例年同様３名の若手教員の方にお越しいただき，各先生方の現実の姿を具体的かつ興味深く紹介していただいた。登壇いただいた先生の中には，たった１年前には，自分が学生の立場で本分科会に参加した方も含まれており，常設分科会としての本分科会の存在がより意義のあるものになっていることがうかがえる。以下，３名の先生方から分科会の感想や，分科会で伝えられなかった点などについて寄せていただいたものを掲載する。

（伊藤貴昭）

明治大学教育会に参加して

畑　智明（川崎市立宮内中学校）

今回私は，大学時代にお世話になった，伊藤貴昭先生との縁で，明治大学教育会第10分科会の発表に参加させていただきました。「若手教員と語る」ということで，何を話せばいいんだ…。と悩んでいた私ですが，自分なりに自分自身の経験（少ないですが…）や悩みなどをお話しさせていただきました。反応はよかった？悪かった？かわかりませんが，色々な学生の方や現役で先生をやられている方の話も聞けてとても貴重な経験となりました。ありがとうございました。少し，私自身の話を書かせていただきます。

私は，2016年に母校明治大学を卒業し，明治大学資格課程事務室にお世話になりました。縁あって多くの職員の方や，教職課程の先生方と交流を持たせていただき，多くのことを学ばせていただきました。急ではありましたが，その年（平成28年度）の７月より川崎市の臨時的任用教員として，教員生活をスタートしました。初めはわけも分からない教員生活でした。どのように授業を工夫すればいいか。どのように同僚の先生方とコミュニケーションをとればいいのか。分掌の仕事は何をすればいいのか…など。様々なことに悩

み，ある時には先輩の先生方に相談するときもありました。中でも，一番悩み苦労したのは，生徒との関係づくりでした。どこまで寄り添っていいのか。どこまで怒っていいのか。何もわからず手探りの中，ある時に一緒に理科を教えていた当時の学年主任の先生にこんなことを言われました。

「いい意味でてきとうでいいんだよ」

その言葉を聞いて，気持ちが楽になりました。悩みや相談を聞いてくれる先輩がいるというのはとても大切だと感じました。「テキトー」ととらえるか，「適当」ととらえるかは様々ですが，私なりに息抜きするときはちゃんと抜くのが大切なんだなと感じた言葉でした。今でもその先生とは理科の授業のペアを組んでいます。毎回の授業が工夫されていてとても面白い先生です。その先生がいつしか私の「理想の先生」となりました。

次年度（平成29年度），臨時的任用教員という立場でしたが，初めての担任という重責を担うことになりました。クラス運営は楽しいこともあれば大変なことも多かったです。ですが，学級が向き合った課題や困難に対し，クラス全員で考え，解決しようと毎日のように頑張りました。私自身も38人目（＋１）の生徒になった気持ちで毎日を楽しみました。

運がよく？川崎の採用試験に合格し，初任者として平成30年度を迎えました。学校もそのまま変わらず，同じ学年を持たせていただくことができました。体育祭，合唱コンクールなどどの行事にも全力を注ぐ生徒たち。その姿を見て，私も頑張らなきゃといつも感じています。何事にも全力で取り組める，元気な挨拶をしてくれる，素直で明るい宮内中学校の生徒たちが本当に大好きです。

今，私は学校の職員室でパソコンと向き合いながらこの文章を打っています。この文章を読む皆さんの中には，教員を目指している人もいると思います。私は大変な仕事についてしまった…と思うこともありますが，この仕事ができて本当に幸せです。「教員という仕事は大変だ」とよく言われます。確かにそうだと思います。でも，どんな仕事よりも情熱を注げます。やりがいを感じることができます。

明治大学で教職課程を学んだ皆さん。ぜひ，未来を背負う子供たちのために尽力してほしいです。私も頑張ります。貴重な経験をありがとうございました。

伝えることの大切さ

水谷　円香（日本工業大学駒場中学校）

１．はじめに

今回このお話を頂いた時，「こんな日が来るとは！」という思いになった。何故なら，私は2017年度の『若手教員と語る分科会』にリスナーとして参加していたからである。聞

き手であった自分がまさか登壇者になるとは思いもよらなかった。というのも，2017年度の分科会で私がお話を聞かせて頂いた先輩方は，どなたもストイックに，先進的な取り組みを行う進学校の先生が多かった。対する自分にはそこまでの実績や功績はない。はてさて何を話そうかと，悩ましかった。

しかし結局は自分の粗削りで未熟な部分と，それでも持っている信念をありのまま伝えることが何かの架け橋になればと思い，今回の場に登壇させて頂いた。この報告書では，本分科会での内容を少し深め，最後に登壇した感想を述べさせて頂く。

2. 10代に働きかける大人として

学生時代，教師とは「充実した生活を送る大人」であることが大切だと教わる機会があった。それは都庁で行われた，東京都教員採用試験の説明会で聞いたお話だった。本校の分科会同様，その説明会では，現場の教員から仕事の実態について聞くコーナーが設けられていた。そこに登壇された女性の先生が，「休日は何をして過ごされますか」という質疑に対して，「テニススクールに通ったり，登山をしたりしています」と答え，以下のようなお話をされた。

「教師は充実した大人であることを見せて，『社会人は楽しいんだ』と生徒に未来の可能性を提示することが大切だ」。

この言葉は，今も私の心に残っている。現代の若者は社会人の過労やハラスメントなどを耳にする機会が非常に多い。職業観に関して日々ネットニュースやテレビで流れてくる情報はマイナスなものばかりで，段々と仕事に対するイメージが否定的なものへと転化するのも無理はない。試しに本校の中２生徒たちに職場取材の事前学習で「仕事のイメージは？」と尋ねたところ，「ブラック」「サービス残業」「過労死」などマイナスな面に次いで「お金」という結果だった。近年の就職は売り手市場だと言われているが，若者の働きたいという意欲がなければ，ただ門戸を開けっぱなしにしても意味がない。従って，我々教員が仕事とプライベートのどちらも充実した生活を送ることは，働く大人の魅力を伝達する有用な手段だと言える。またますます多様化する教育ニーズにも，ゆっくり見つめる時間を持つことが出来れば，より開いた眼(まなこ)で向き合うことが可能だ。こうした理由から，この言葉をますます大事にしていきたい，またエネルギーに溢れる若者に伝えていきたいと考えている。

3. 生徒に寄り添った指導

赴任して早９か月。まだまだ経験と呼べるほどのものは無いが，教師としての生活に少しずつ慣れてきた。そうすると，上半期の反省が次々と零れ出てくるようになった。その大半が，「あの時，もっと別の言い方があったのではないか」というものである。

例えば宿題をやってこなかった生徒に，何と声をかけるか。一回や二回ならまだいい

が，何回もやってこないと，怒りの感情が湧くのは当然だ。しかし頭ごなしに怒ることは教師でなくても出来る。それは指導ではないと気づき，次第に言葉を選んで伝えることを始めた。やらない理由は必ずある。彼らはすぐに言葉を零すことはないが，根気強く声をかけ続けると，ポツリと「内容がよくわからなかった」「最近，家で嫌なことがあった」など本音を打ち明けてくれる。生徒たちはこういったＳＯＳを素直に発信できずに，教師が目くじらを立てるような態度に隠してしまう。傷つくような態度を取られた時に，いかに冷静に話を聞くことが出来るかが，その生徒との信頼関係を醸成する鍵となるだろう。

その言葉選びが巧みな先生方を見ていると，頭が下がるとともに，自分の未熟さを悔やむ。同時に，これには経験が必要なのだとも痛感する。未来の教師の皆さんにも，「困った子は困っている子」であると常に意識して，生徒指導に臨んでほしい。

4. 本分科会に登壇した感想

今回の分科会のアンケートを拝見したところ，「細かい仕事内容が参考になった」「若手教員の苦悩や喜びが知れて，やる気がでた」など嬉しいご感想を多く頂いた。中にはベテランの先生方から「活き活きとしている，若手の熱量を感じた」といったお言葉を賜り，非常に貴重な機会となった。私の現在位置を確認することができた分科会であったように思う。また，聞き手である学生の熱量に感心した。まだ進路を決めていない時期であろうに，真剣に聞くその姿勢が非常に印象的であった。何か一つでも皆さんの人生へのヒントになれれば幸いであると，こちらも話に熱がこもっていった感覚は記憶に新しい。

本分科会を通して，私は改めて教師が持つ「伝える」という仕事の影響力について考えた。一期一会を尊び，感動や体験を分かち合う。人生を通して誰かの人生に言葉で働きかけることの苦労や喜びは，教師ほど感じるものはないだろう。これからも，生徒とともに成長していく教師でありたいと思わせてくれた会だった。

分科会で出会えた学生との縁が，いずれ教員人生のどこかで再び結ばれることを願う。

5. おわりに

最後に，本分科会を支えてくださった伊藤貴昭先生をはじめとする先生方，教職資格課程事務室の方々に心から感謝の意を示したい。

明治大学教育会分科会　報告書

松本　夏樹（東京都立第五商業高等学校）

はじめに

私は平成30年度の東京都の教員採用試験（数学）で合格をいただき，４月から上記の通り東京都立第五商業高等学校で働いている。本研究会に招待していただいたときに，去年

のこの時期に，教員になるにあたり不安だったことと疑問であったことを中心に話したいと思いパネラーとして参加させていただいた。

1. 教科について

私はこの時期に毎日の授業準備が間に合うかが不安で，学生時代に何か準備をしなければいけないと常に考えていた。そこで，実際に一週間の時間割を見ていただき，また具体的にどこの空きコマでどのくらい準備をしているかなどを話すことで，学生の皆さんにより教員の生活をイメージしてもらうことを意識して話をした。その中で，最も伝えたかったことは，教員は他の社会人と同じように残業はあるが，それは過大なものではなく，日々の勤務の時間内を効率的に使うことで十分に自分の時間を確保できるということである。私も赴任当初は，一日の勤務時間をうまく使えず，毎日残業をしていた。しかし，先輩や指導教諭からアドバイスをいただきながら，より効率のいい一週間の予定をしっかりと立てていくことで，十分に勤務時間内でやるべきことを終わらせられるようになった。学生の皆さんには，働き始める前のこの時期にネガティブな面ではなく，ポジティブな面が少しでも伝わればと思い話をさせていただいた。

2. 分掌について

私の現在の校務分掌は進路指導部の就職担当で，主に生徒の就職の支援を行っている。ここで私が学生の皆さんに伝えたかったことは，生徒の見えないところで教員は様々な仕事をしているということと，教員になってからも学ぶことは多いということである。私は教員採用試験で教員になったため就職活動というものをしたことがなかった。そのため，今年度の初期は教科の準備と並行で企業研究を行ったり，就職のための書類の作成の仕方を学んだり，おおよそ去年まで私が思い描いていた教員生活とは違った。しかし，実際に働いていると，普段の授業で触れない生徒と話すことができたり，生徒と合格を一緒に喜ぶことができたりと，むしろ学ぶことが多いことが分かった。教員は教科指導だけが仕事ではなく様々な業務があるということは，悪いことだけでないことが学生の皆さんに伝わればと思う。

3. 部活動について

私は現在，女子バスケットボール部の顧問と女子サッカー部の副顧問をしている。部活動の顧問は，私が学生のころは最も楽しみで，ある種息抜きであると考えていた。また，顧問をやりたくて教員を考えている学生もいると思い，今回の教育会では顧問の難しさや苦労を話させていただいた。具体的な内容を話すことができなかったが，「教員生活の苦労の９割が部活である」という言葉で，辛いと想像していたことが実際には楽しいこともあれば，楽しいと想像したことが実際には辛いこともあるということが伝わればと思う。

おわりに

本年度，はじめて教育会に参加をさせていただいた。私は人前で数学以外のことを発表したのが初めてで，与えられた時間を大幅にオーバーしてしまい，発表することの難しさを改めて学ばせていただいた。また，学生の頃の自分を思い出しながら発表の内容を考え，その発表を聞く学生の皆さんの姿を見て，初心に帰った気持ちになったことと同時により一層の自己研鑽の必要性を改めて感じることができた。来年度以降も，教員として一層のスキルアップをするとともに，教育会や研究会などにも率先して参加することで，今回の研究会に来てくださったすべての方々に恥じない社会人になっていきたい。

最後にこのような貴重な機会に招いてくださった伊藤貴昭先生をはじめに，講演会を支えてくださったすべての方々に感謝します。